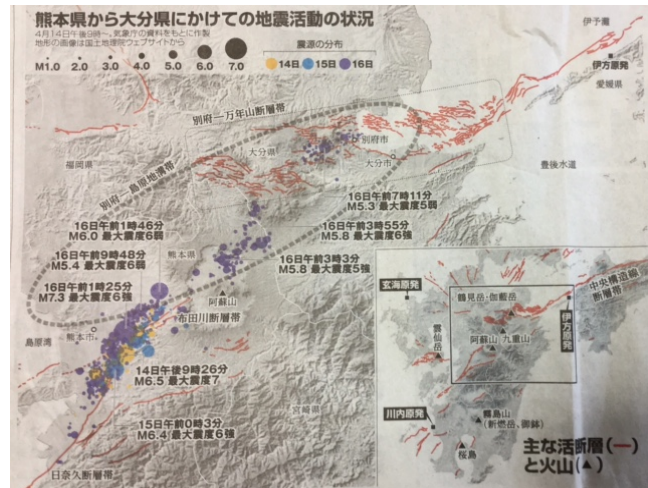


「地震列島」と原発

写真は朝日新聞 4 月 17 日朝刊「時時刻刻」から。最初の地震は日奈久断層帯の北部で起きたが、16 日の本震はその北東側の布田川断層帯で起きたとみられる。今後懸念されるのは、さらに別の活断層による地震が誘発される可能性だ。

相次ぐ地震の震源は、「別府-島原地溝帯」と呼ばれ、多数の活断層がある溝状の地形に沿って分布する。さらに北東には、四国を横断し紀伊半島に延びる長大な活断層、中央構造線断層帯が連なる。林愛明・京都大教授は「今回ずれた断層の延長線上にひずみがたまり、大分県側で M7 級の地震が起きることも否定できない。四国側の中央構造線が動く可能性もある」と話す。地震が起ると、震源になった断層にたまっていたひずみは解消されるが、逆にその周囲や延長線上にある断層のひずみが増えることがある。その影響は、離れた地域にも及ぶ。「地震列島」には、多くの火山も活動を続けている。



林愛明・京都大教授は「今回ずれた断層の延長線上にひずみがたまり、大分県側で M7 級の地震が起きることも否定できない。四国側の中央構造線が動く可能性もある」と話す。地震が起ると、震源になった断層にたまっていたひずみは解消されるが、逆にその周囲や延長線上にある断層のひずみが増えることがある。その影響は、離れた地域にも及ぶ。「地震列島」には、多くの火山も活動を続けている。

「今までの経験則から外れている」16 日未明に起きたマグニチュード (M) 7. 3 の「本震」の後、熊本県阿蘇地方や大分県でも M5 を超える大きな地震が発生したことについて、同日午後に見会った気象庁の橋本徹夫・地震予知情報課長はこう表現した。国内では、14 日に発生したような M6. 5 規模の活断層型地震の後、それを上回る本震が発生した記録が存在しないという。橋本課長は「地震活動が今後、どのようになっていくかは分からない」と述べた。

こうした専門家や気象庁の責任者の発言にもかかわらず、川内原発は稼働を続ける。写真のように、川内原発は活断層のすぐ近くにある。気象庁も地震活動がどうなるか分からないという、新たな事態なのだ。それなのに原子力規制委員会は 18 日、「安全問題なし」とした。一連の地震で川内原発で生じた揺れは、設定値より十分小さいからだという。でも、地震活動は「今までの経験則からはずれている」のだ。

なぜ、川内原発の稼働をいったん止めないのか。福島の前例事故、被害の深刻さに目を向けていないのか。原子力規制委員会だけでなく、安倍政権の姿勢を厳しく問いたい。

(2016 年 4 月 21 日)